

精神と「気」そして「祈り」



1898 年 横山大観 屈原

2018 年 4 月 1 日

野口幹夫

目次

～「精神のエネルギー シリーズ」これまでの概要～	3
精神のエネルギー第4回新シリーズその2 精神と「気」と「祈り」	5
1 われら宇宙の子	5
1-1 ベルクソンにもどって	5
1-2 宇宙にいのちのある不思議さ	7
1-3 人間の精神の不思議さ	8
2 「気」とは何か	9
2-1 私の修めた私の修めた空勁気功	9
2-2 その修練と効果	10
2-3 上海で気功大会に参加	11
2-4 経絡と気の流れ<ツボと経路図>	13
3、「祈り」「瞑想」について	15
3-1 神との対話	17
3-2 無神論者の祈り 瞑想	17
3-3 死を迎えるものの祈り	17
3-4 念じる	18
3-5 念ずることの「気」の発生と伝播 テレパシー	19
4. エピローグ	20
参考文献	23

～「精神のエネルギー シリーズ」これまでの概要～

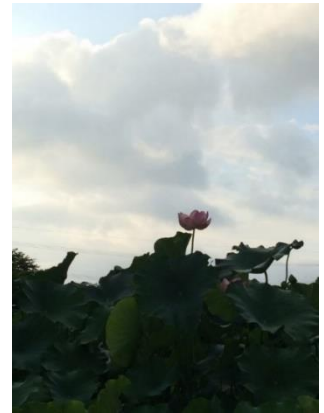
精神のエネルギー第1回 2016-3-16

ベルグソンの「精神のエネルギー」は、どんな時代背景で語られ、何を人類に訴えたかを紹介した。

彼が活躍した世紀（19世紀から20世紀の初頭）はかつてない規模で、また洋の東西で、天界や死者から人々への働きかけが、起きた時代であった。

それは人類が戦争と地球汚染の危機に突入する危険の知らせであり、人類の立ち直りを呼びかけたものであった。しかし人類は、その危機の担い手でもあった科学技術を唯一のものとして信奉して、その天からの呼びかけの声を聴いた人々を非科学的として排除した。

ベルグソンは、人間の精神にかかわる現象は繰り返しの無いもので、事実を数字で判断することだけを科学とする態度では、精神現象の本質を見極めることはできないと指摘した。人間の精神の知られていない能力の探究には、これまでの科学手法にはよらない方法を開発することしかないと述べた。そしてそのような精神科学・心霊研究の道が開いた人類は新たな進化の段階に達するであろうと説いた。



精神のエネルギー第2回 2016-5-18

第1回の続きとして、ベルグソン亡き後、彼が期待した精神科学は20世紀にどのような展開をしたのかをフォローした。20世紀は科学技術と経済万能主義が精神世界をも支配しつくした時代で、心霊現象は影を潜めた。精神科学は統計に頼る実験心理学に落ち込んだ。テレパシーの実験研究は、人間の主観的意欲を抜きにした現象の追及だけが行われたが、結果は否定的になってしまった。それを克服せんとして深層心理の探究が始まり「超心理学」の分野が広がったが、西洋哲学には新鮮だったが、東洋流の精神修養から悟りの追及を探った結果に終わった。

一方日本の宗教界はどのような展開があったかを調べた。大きな影響を与えた大本教などの新神道は軍国主義のもとで弾圧されて、分流していき力を失った。戦後創価学会などの現世主義的な宗教が勢力を持った。

21 世紀に近づいて科学技術・経済万能主義にほころびが見えて、ようやく人々は精神世界が天上界へひろがるとの視野をおずおずと取り戻し始めた。新興宗教にその姿がある。驚くべきことにその最先端はアニメ映画などの大衆文化芸術の分野に見られ、人々の支持を集めるようになった。

精神のエネルギー第3回 新シリーズその1 2017-4-19

「身体と精神のつながりについて」



ベルグソンは自らの哲学を受け継ぎ、新たな科学的知見でそれを発展させることを人類に求めた。及ばずながら私は、それを目指してベルグソン以降に発見された科学的知見を探り、それに基づいて新たなベルグソン哲学の開拓を進めていくシリーズを始めた。その第1回として、基本に戻り身心二元論の歴史を振り返った。意外にも二元論を積極的

に否定したという哲学的根拠は無かった。その主張はたんに人々が漠然と科学的ではないと考えているだけだった。むしろ人間の古代からの正統的哲学は二元論なのだ。

世の中で困難に直面している人間の諸現象で精神と身体が別な存在だとすれば説明できることが沢山ある。脳震盪症でその事例を紹介した。

最新の脳科学の解明で「心」の働きが脳の皮質下部の古い脳にあることが分かった。それは動物にも共通し、肉体が生きていくために必要な感情を出発とする「心」である。疑いもなく「心」は動物にもある。しかし「精神」は人間が初めて取得したものであり、動物にはない。「精神」は「心」と違い、脳にも肉体にも属さない独立したもので時に肉体に反抗するものである。心は脳科学で迫ることができるが、精神には現代科学では解明する方法がない。

そこで精神についてそれは「ダークマター」で出来ているとの仮説を述べた。精神にも遺伝子があり、先祖から受け継ぎ、幼児を過ぎたところから徐々に成長し、子孫に精神遺伝子を受け継いでいく。そして肉体が衰えても精神は成熟を続け、やがて肉体が死を迎える時、その束縛から離れ5次元の宇宙空間に飛び出していく。

精神と「気」と「祈り」

1、われら宇宙の子

1-1 ベルクソンにもどって

いのちそのものもそうだが、その頂点にいる人間は物理的には驚異の存在だ。宇宙物理が進むにつれ、その不思議さが増すのだ。ベルクソンが主著「創造と進化 エランヴィタール」で述べた「いのちの哲学」は彼の直観であったが、現代科学でその裏付けが生まれてきたのである。彼はこのように述べた。

「生命は、宇宙の始まりから、全体として一つの中心から発して伝播していく一つの巨大な波である。」

「すべての有機的存在は、最も下等なものから最も高等なものにいたるまで、生命の最初の起原から現在に至るまで唯一の連続する波の躍動の連続である。」

生命の波は、物質の抵抗に阻まれながらそれを利用しつつ、枝分かれしながら進んだ。初めの枝分かれは植物と動物である。そしてその波の先端に精神を得た人間がいると述べた。ベルグソンのこのいのちの進化の哲学は人類が宇宙のビッグバンのことは知らない時代に打ち立てられたのだから驚く。

20 世紀の宇宙物理学は宇宙の始まりにビッグバンがあったと解明したが、21 世紀の宇宙科学はその先に進んで宇宙は生命に満ち溢れているというパンスペルミアなる学説を生んだ。その証拠は多く出ているが、その一例をあげると、無数にある銀河星団は、すべて光り輝くが、ところどころに、そのひかりをさえぎる黒い雲のような星雲が存在する。その光吸収特性の測定をすれば、なんと星雲は、無機物質にあらず、いのちの微粒子から生まれた有機物質から成り立っていることがわかってきた。また太陽系を駆け巡る彗星から分離して地上に落下した隕石はこれまでも数多くあるが、2011 年にその一つを分析した NASA はそこから生命の証拠である DNA の成分を発見した。

今一つの大発見は、科学自ら自分の科学信奉を根本から揺り動かしたものである。すなわちこれまでの科学が絶対と信じていた物質は、宇宙の充満するもののわずか 4%を占めるだけで、23%が未知の粒子（ダークマターと名付けられた。）そして 73%が未知のエネルギー（ダークエネルギーと名付けられた）であると。つまり我々の科学は 96%未知の世界に漂っているという発見であった。

人間の身体は少なくとも科学的にわかっている物質で成り立っている。それは炭素・酸素・窒素・鉄などの重元素から出来ているが、それらは宇宙のはじめには存在しない。ビッグバンのあとまず水素とヘリウムができてくるが、大きな原子は、宇宙が進化し、星々を生み、圧縮されやがて超新星爆発という段階で初めて生まれた。それが宇宙にばらまかれ、はるばると宇宙空間を旅して、やがて我々の身体になっているのだ。我々はまさしく「宇宙の子」である。

宇宙の子であるならば、それらの重元素より宇宙での出自が早いダークマターやダークエネルギーを、その構成素子として体に持っているとは推定するのが自然だ。ダークマターは銀河の存在する場所に偏在することが観測されている。我々は銀河の一員であるので、ダークマターとともにあるのだ。一方ダークエネルギーは宇宙に一様に存在している。ともに人間の中に存在するとみていいわけだ。

しかしそれはどこにあるのか謎だ。

私は未知の人間精神こそ、その未知のダークマターから構成されているのではないかとの仮説を、このシリーズの前回の小論で述べた。

ダークエネルギーもダークマターとともに「いのち」という不思議な存在に欠かせない重要な役割を持っている可能性がある。今回は正体不明のダークエネルギーが波動であること注目して新たな仮説を広げていきたい。

ベルクソンの言う「巨大ないのちの波」はこのダークエネルギーの波なのかもしれない。そうであればすべてのいのちの創成の元になっているいのちの波であり、植物・動物などすべてのいのちに共通するものであるはずだ。その特徴にも注目して矛盾の無い仮説としたい。

1-2 宇宙にいのちのある不思議さ

我々は宇宙の子である。しかし孤独ではない。周りにはあらゆるいのちに囲まれていることがわかった。しかしこのいのちは物理学では理解できない。ベルクソンの時代にうまれた有名な物理の法則がある、エンジンの開発にかかわる熱力学で生まれたエントロピーの法則というものだ。熱交換の効率を求める中から生み出された法則だ。ガソリンなどの良質の熱量がエンジンを動かした後、使い物にならない廃熱が放出される。そこには深い真理が含まれていた。熱力学にとどまらずにさらに普遍化されると、「秩序あるものはすべて無秩序に向かう」という法則に拡大された。すべての物理現象に適用される真理である。

それに従わないのがいのち現象だ。すべての「いのち」は単純なミドリムシであれ、クジラのように大きなものであれ、その体は精密な秩序を保っている。エントロピーの法則にしたがえば、どれほど精密な秩序であろうと動けば秩序を失い、崩壊するほかない。ところが「いのち」は生きているうちは秩序を更新していくし、そればかりか「いのち」が受け継がれた瞬間、それは自分で栄養を取り成長し新たな秩序を構築していく。エントロピーの法則に従わないのだ。著名な物理学者のシュレージンガーは困ってマイナスのエントロピー量を考えたが行き詰った。物理では、いのちはあり得ないのだ。むろん頑固な物理学者は「エントロピー説は生命にも貫徹する。なぜなら死ねば無秩序に崩壊するからだ。」という。それは論理矛盾だ。死ねば「いのち」ではなくなるからだ。

そこで現代物理学では取り扱えないダークエネルギーの登場を願わなければならない。これは不思議なエネルギーだ。ダークエネルギーは宇宙が膨張する姿を観測する中で発見されたので、その本質は斥力だとされている。すなわちダークエネルギーは反重力なのだ。ダークエネルギーは宇宙に一樣に存在している。熱力学的に存在するすべてのエネルギーはエントロピーの法則に従うが、このダークエネルギーは秩序を生み出す反エントロピーエネルギーかもしれない。先に述べたようにベルクソンが指摘した宇宙の「いのち」のほとぼしりである波動がこれなのかもしれないのだ。

しかしそれは見えないし物理計測にもかからない。それと同じように見

えないし測ることもできないが、人間が有史以前からその存在を知って、それを利用することを学んでいたものがある。人間ばかりでなくいのちの先輩である樹木にもそれが存在するという普遍性があるものだ。その不思議なもの、それは「気」である。

「気」はダークエネルギーかもしれないとある新進気鋭の科学者がつぶやいている。(注7)「気」がダークエネルギーのような普遍なものであれば、動植物すべての「いのち」にまたがっていることになる。

「気」を修練した人は巨木に掌を向ければ「気」を感じるし、修練を積んだ人は植物と会話ができるのは「気」を介してなのかもしれない。

1－3 人間の精神の不思議さ

人間はいのちの進化の最前線にたち精神を得た。人間の精神は肉体に繋がりながらも別な存在だと考えたほうが合理的だということを前回の小論で述べた。それはどんなものだろうか。その機能から想像すれば、精神の本体は、身体をはるかに凌駕する精緻なシステムである。それは私の推定だが、ダークマターを骨組みとし、ダークエネルギーで動くシステムではないだろうか。22世紀にはすこしずつ解明されてくるだろう。

精神の能力は、芸術、科学探究などすべて人間らしきをもたらしているのだが、意外な能力がもう一つある。それは「気」を使う能力をもっていることだ。「気」の本質はいまだに解明されていない未知の存在だが、それが存在することが古くから知られており、その強化の方法も知り、使いこなす方便も知っていたのだ。

一方「気」はすべてのいのちに共通している。植物や動物にも共通しているが、それらはその存在を知らない。人間も「気」を強めて健康に役立てたり、闘争力として利用できる人達は少数だが、一般の人もそれと知らずに「気」の力に接しているのかもしれない。それは元来人間だけに備わっている「祈る」という能力と、「祈り」「念ずる」ことが発揮する偉大な力に現れているかもしれない。「気」を知ることが人間の精神の何であるかを見極める有力な道につながる可能性がある。

精神の探究の第4回はこの「気」と「祈り」について考えてみたい。

2、「気」とは何か

2-1 私の修めた空勁気功

私のささやかな「気」との出会いと修練を紹介する。

① 空勁気功との出会い

1994年9月の始め、私が勤めている会社の近くの駅巣鴨を通りかかったとき、気功教室のポスターをみた。気功教室は、いまあちこちにあって、めずらしくはなかったのに、この健康のための空勁気功には妙にひきつけられた。私は当時59才、前の年に会社生活では、常務取締役から監査役になっていた。いわば第一線を退いて、人生の立て直しの時であった。2年前から腕肩の痛みが続き、針灸や指圧治療にしょっちゅう通っていた。金もかかるし、受け身で治すことに嫌気を感じていた。今なら時間はある。会社の近くでもある。ポスターにあった地図を頼りにたずねた。小さなビルの細い階段を4階まで上がったところに、1室があって、中国語の教室と共に空勁気功教室があった。小柄な今村末子先生は、驚いたことに私と同年生まれであった。しかし人生のご苦労がちがう。我々の世代は戦争という不幸な時代を共にしているが、今村先生はその時代を満州で過ごされた。私の高校の同期生の中で満州育ちはみな大人びていて敬意を抱かざるを得なかった。したがって今村先生にもまず敬意をもった。先生は中国残留されておられるうちに医学の勉強をされた。そして医療関係の仕事に従事され、実地に医学を勉強された後、気功の黄仁忠先生に弟子入され、空勁気功を会得された。空勁てなんですかと、聞いたら強い気功という意味ですと教えてもらったのが、最初だった。免疫功法のコースが始まった。

② 始めの4ヵ月で得たこと

馬歩站樁 これは何と読むの？ どんな意味？ 聞きたいことはあったが、我ながら感心するほど素直に、いわれるとおりの体形を作った。2分も経たないうちに膝が痛くなった。これを30分もやるのですか？ これはとても駄目だ。というのが第一印象であった。(なお馬歩站樁に日本語の読みはバホタントウ)

手は梯形とするだけだが、それも体が固くてぎこちなく、まずリラックスを会得する必要から始まった。それでも、毎週毎日頑張って、4 ヶ月弱で免疫功法を一通り終わった。気がついて見ると、肩の痛みは消えていた。しかし、それが気功のせいとは確信できなかった。ちょうど治るべきときが来ていたのかも知れないとも思っていた。2 ヶ月位経った頃、先生は『氣』を感じますかと聞かれた。しかし『イヤーはっきりとは感じません』と答えるほかなかったのであるから。まだ『氣』のことも気功も確信していなかったのである。しかし肩の痛みは、この頃を最後として嘘のように消えたことは事実である。そればかりではない。私は土曜日日曜日の朝ジョギングをし、その前後に柔軟体操をするのが習慣だったが、その時のばした体のあちこちにあった痛みが皆なくなったのである。毎週のように通っていた指圧所の先生には気の毒をした。彼は上顧客を一人失ったからである。いつの間にか『氣』を感じはじめた。中級に入ってからかもしれない、先生の予告通り馬歩站椿を始めると、手がびりびりしはじめる。膝を折ることに秘密があるのか。こんな一風変わった姿で3分以上立つことに、何かが隠されていそうだなと、思う。今村先生は膝は第2のポンプだとおっしゃる。今まで知らなかったことが一杯ありそうだ。

通い始めた頃、教室1年先輩の井上さんがよく一緒であった。70才のお年寄りだったが、いくつかの重病を乗り越えてこられた人生の達人といったひとであった。いろいろ経験を話してくれた。彼は『氣』を確信していた。彼には『氣』が見えるというのだ。『氣』が起きているとその時薄暗がりでも両手の指を付き合わせると、その間に『氣』が走るのが見えるそうだ。「野口さんにはまだ見えませんか」と聞かれた。あれから何年もたつが私にはまだ見えない、井上さんは亡くなられて、懐かしい思い出になった。井上さんが教えてくれたことに、もう一つ公園の老木から氣を受けるということがあった。両手で、すこしすき間をあけて、木をはさみこむのである。すると、びりびりと木の氣が両手に伝わるという。これはやって見るとなるほど何か感じるのである。これは何なのだ？

2-2 その修練と効果

その後も練功を続け、結局3年かけて中級の功法まで学んだ。間違いなくより健康になったと自覚した。花粉症も例年より軽くなったようだった。

た。

それ以来現在も機会を見つけて気功を実行している。毎週日曜日の教会にいてミサに参加するが、この時心をイエスに向け、かつ体はイエスに奉献する姿を取れば、気功の基本になる馬歩站樁の姿勢になる。ほぼ 30 分の練功になる。幸い健康なのはそのせいかもしれないとひそかに思っている。

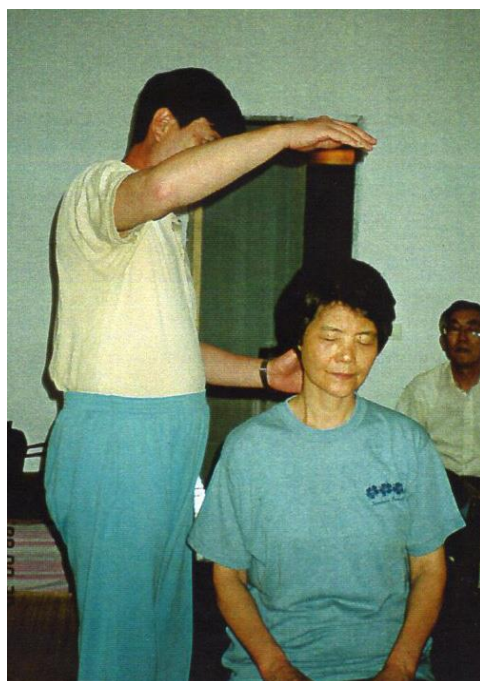
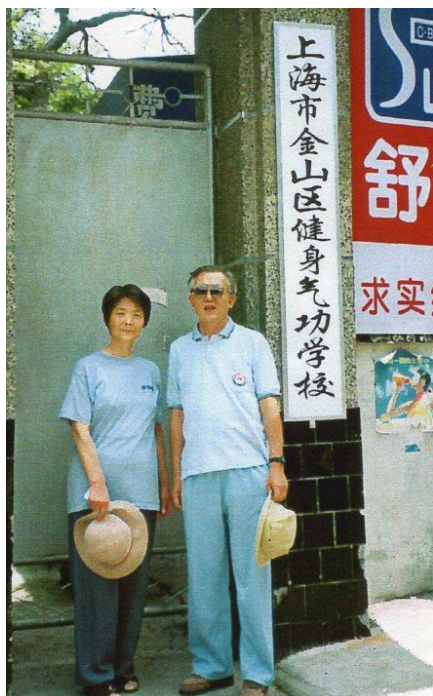
2-3 上海で気功大会に参加

この空勁気功をはじめて 3 年たったころ、記念大会が上海であるのに誘われて夫婦で参加した。1999 年 7 月のことだった。この世界には新参者だったが、日本からということで賓客として遇された。記念写真で前列左端に二人の席を与えられた。



上海市金山区というのは、空港から 1 時間ほど南に行った小さな田舎町だった。このあたりに日本軍は上陸し、南京を占領しに進軍していったので、この田舎の人々の記憶に生々しかった。町の食堂で年配の男が、我々が日本から来た人間と知って難詰しようと寄ってきた。話し合って最後は笑顔で別れたが、そんな場所であった。

3 日間の大会では世界各地からの経験の発表や実践治療などが行われた。妻は気功をやっていないので、もっぱら被験者となって奉仕した。



「空勁気功」という功法は1992年生まれの新しいもので、黄仁忠師が少林寺内勁功と天台羅漢功を総合発展させたものである。創始者の右腕である沈老師はこの大会でこの気功法の特徴を次のように解説された。

「練功を通じて、外気を内収して真気に変成する。自身の健康を助ける。また人体の潜在能力を動かす。すなわち内気を外放することができるようになり、それを自分にフィードバックして身体の調節をする。

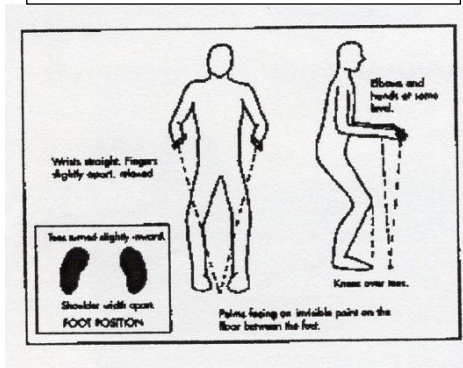
7年間の調査ではこの気功学んだ約7割の人がはっきりとした効果を感じて、効果はなかったとした人は5%だった。

伝統の気功は調心、調息、調身の三つを指導するが、空勁気功は調身に専心する。身体 of 形と運びを訓練するだけである。それによって調心、調息はおのずと達成するのに任せる。」

このように空勁気功は伝統の気功法から精神性を抜いているので、唯物論思想の中国共産党の受け入れが良いのかもしれない。この大会のころ毎日のように法輪功の弾圧のニュースが中国でも報じられていたが、法輪功は新興宗教としてとらえられていたのと、好対照であった。この大会は上海金山区の党の施設で行われた。その教本から引用を続けると、

「馬歩站椿は空勁気功の基礎功法である。膝を屈して、跨に座るように、腹を引き込めることを求めるのみである。踵まると下部の気血の圧力が増加し、体脈の運転を快く整える。腹を引き、肘を下げることは自然に逆腹式呼吸を形成する。

米国の気功紹介書にあった馬歩站椿のイラスト



跨に座る形は、大変重要である。跨とは腰と小腹を指すが、これらは人体の上下を繋ぐ盤であり、また腎、肝、脾、生殖器の重要な器官が分布し、さらに命門、丹田などの重要なつぼが集中して経絡の交差点でもある。跨部に座りリラックスし、長時間経過する站椿は、全身の骨格と肌身に一定の張力を保持させることによって、骨格肌身器官の効能と活動を著しく改善し、体の内気の流通を良くし、清らかなものを昇らせ、濁りを降ろす。気血を調和し、精気に

充ち、五臓六腑が良好な作用を発揮するようになる。このように站椿功の練習は病気を防ぎ、治し、強い健康な体の作用を起こす。」

「免疫功法のフィードバック療法は、空勁気功の一つの特色である。修練した内気を手掌からつぼと免疫器官へ照射する。一時停留したり、緩やかに掃くように動かす走査で行う。その目的は、自身の免疫系統を適当な状況に調整させるフィードバックを行うことである。」

これらは言葉で理解することはむづかしい。実際指導者の形を見て、自身でやってみれば理解できるものである。練功が先決である。

2-4 経絡と気の流れ＜ツボと経路図＞

中国医学の基本は、全身に張りめぐらされた「経絡」の詳細な把握であり、そこに流れる「気」の流れをよどみなくさせることにある。その発見は紀元前3世紀の医学書である「黄帝内経」(こうていだいけい)にさかのぼる。それは「気」の医学である。内臓と諸器官をくまなく張り巡らせているとともに、要所にツボがある。もし「気」の流れが停滞すると身体に不調が生じるとみている。そこでツボを鍼や灸で刺激して「気」の流れを快復させると体調は回復するとみている。

体の後面の経絡とツボ

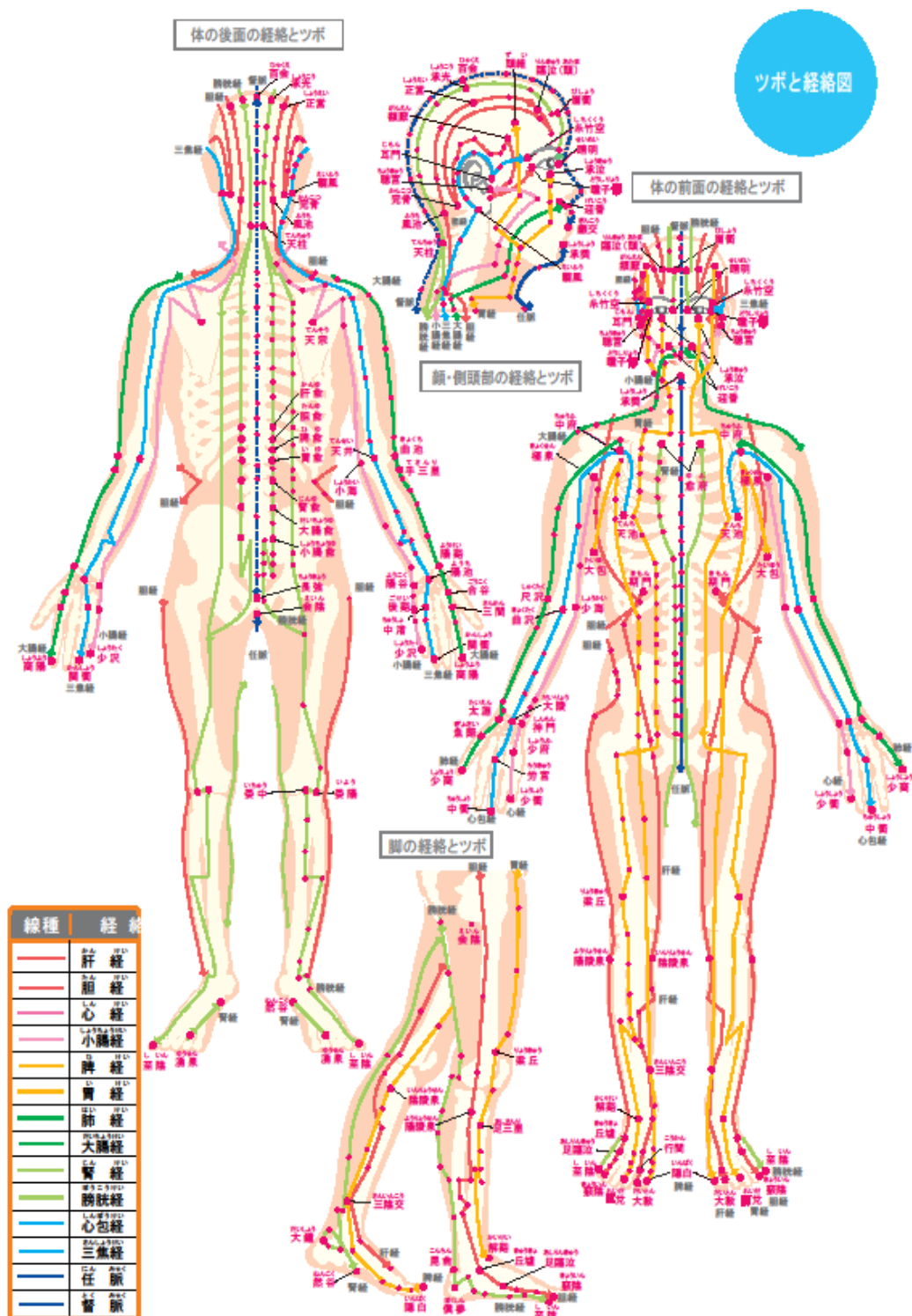
ツボと経絡図

体の前面の経絡とツボ

顔・側頭部の経絡とツボ

脚の経絡とツボ

線種	経絡
赤	肝経
赤	胆経
赤	心経
赤	小腸経
黄	脾経
黄	胃経
青	肺経
青	大腸経
緑	腎経
緑	膀胱経
青	心包経
青	三焦経
青	任脈
青	督脈



経絡の「気」の流れが血液と血管と決定的に違うのは、体内に閉じた系ではないことだ。外に解放され宇宙と直接つながっているのだ。それはツボの中に、そこから「気」が出入りする穴があるシステムになっている。特によく知られているのは老宮という掌の中心にあるツボだ。外気功としての鍛錬をすると単に「気」が出入りするだけでなく、放射される段階になる。練達の武術士が気力の遠当で相手を吹っ飛ばす。これは「気」の放射がすさまじいことを示すとともにそのエネルギーは斥力のエネルギーであることも教えてくれる。ダークエネルギーは斥力の性質を持っていることを思い出すべきだ。

ところで「気」は基本的には肉体に属している。したがって「気」を強める気功は、体の形だけの練功でできる。そこでは特に精神作用を使うことはない。しかし「気」の研究者である池上正治氏は「気功は精神と肉体を統一する。…気功の後の爽快感は人体が「気」の流れている小宇宙であることを実感する最良の方法である。」と述べている。

また中国では精神集中や瞑想で「気」を鍛錬することも行われている。「気」は肉体と精神との橋渡し役なのかもしれない。外気に発せられる「気」は斥力であり、ダークエネルギーがその性質を持っているとすれば「気」まさにダークエネルギーである可能性が高い。

3、「祈り」「瞑想」について

人はだれでも祈る。手術を受ける子供を待つ親は無事にいのちが助かりますようにと廊下で祈る。人間は一人ではない。他者との関係のもっとも純な結びつきはその人のために祈ることである。

人が衰えて身体も動かさなくなった時、それでも人のために祈ることだけはできる。祈りしかできないが、祈りならできるともいえる。崇高な営みだ。平塚の丘の上にある日本最初のホスピス「ピースハウス」の壁にこんな詩があった。

最上の業

「この世の最上のわざは何。楽しい心で年をとり、
働きたいけれども休み、しゃべりたいけれども黙り、
失望しそうなときに希望し、従順に、平静に、

おのれの十字架をになう一。

若者が元気いっぱい神の道をあゆむのを見て、ねたまず、
人のために働くよりも、けんきょに人の世話になり、
弱っても、もはや人のために役たたずとも、

親切で柔和であること一。

老いの重荷は神の贈物。

古びた心に、これで最後のみがきをかける。

まことのふるさとへ行くために一。

おのれをこの世につなぐくさりをすこしずつはずしていくのは、
真にえらい仕事

こうして何もできなくなれば、それをけんそんに承諾するのだ。
神は最後にいちばんよい仕事を残してくださる。それは祈りだ一。
手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。

愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために一。
すべてをなし終えたら、臨終の床に神の声をきくだろう。
『来よ、わが友よ、われなんじを見捨てじ』と一。」

ホイベルス神父「人生の秋に」より

祈り 瞑想 そして念ずる。この精神作用にはその対象や形から様々なものがある。その本質を探る前にいろいろの形を要約してみよう。

3-1 神との対話

カトリックでは祈りは神との対話であると教える。内なる神の声を聴く、自らの生き方に神はなんとおっしゃるか聴く。神は無言である。それでも聞き続けることが大切だ。日常それをつねに行えと教える。そのことによって信仰が活きる生き方ができる。信仰心の精髓が祈りにある。

祈りは宗教宗派が違って、信仰を持つものの基本として共通のものであろう。イスラムはそこに具体的な形を与えた。一日5回マッカの方向を向いて跪いて祈れとした。

3-2 無神論者の祈り 瞑想

禅宗の座禅はある意味で無神論の祈りだ。いまはそれに学んで欧米でも瞑想という形が盛んに行われている。自分の精神の中を見つめ、掘り下げていくのだ。精神の表層は外界によって揺れ動く、その下をどんどん掘り下げていくと阿頼耶識という領域にまで達することができると説く。禅の悟りはそこに得られる。そこまでいかなくても、瞑想によって落ち着いた生活態度を保ち続けることができる。

3-3 死を迎えるものの祈り

精神はやがて肉体を離れる。肉体がその寿命を迎える時、それとともに消滅してしまう道を歩む精神もあるが、望む精神は脱皮して5次元の世界に入ることになる。その分かれ道は重要だ。

祈りや瞑想は、おそらくその発生とともに人類が自ら生みだした精神作業である。人間の発生と共にといったのは、人間が精神を得たときと同じであるが、元来は精神の本質に付帯したものであったと思われるからだ。しかし人間が傲慢になり、自分の運命は自分が決めると思い上がった時、精神の肉体からの離脱をも、否定するようになり望まなくなった。

素朴な人間の精神は脱皮するのである。ただしその時に精神がどんな態度をとるかが問われる。やはり人間の人生で最大の冒険の時である。ぼん

やりしてはいけない。その瞬間を心から希求しなければならないのだ。

祈りとか瞑想 禅などといった精神のあり方は、その人生最後の時に持たなければならない態度の予行演習だと言える。その予行演習をやっている人間はその最後の瞬間もうまくいくであろう。無論それだけでなく人生を過ごす態度も変わってくる。「祈りのある人生」をとられる理由はそこにある。

無神論者はそのような切羽詰まった時しか祈らないのが普通だ。多神教に親しんでいるものの祈りもそれに近い。神は否定しないが積極的に向き合おうとはしない。自然の恵みへの感謝、共同体との連帯感の祭り。全人格をあげてということまではいかない。さらりとしている。

しかしそれでもその最後の時に祈る姿勢を自覚すれば、人生の大半を無神論で過ごしても最後の一瞬に脱皮を求め成功するかもしれない。

3-4 念じる

ベルグソンが「精神のエネルギー」の講演で取り上げたのは、愛する夫が戦場に亡くなった時その場のありさまをリアルに見ることができた妻の証言であった。当時第1次世界大戦がヨーロッパを巻き込み、このようなことが沢山あったのだ。イギリスの心霊協会が数百の事例を聞き取り調査したのである。

テレパシーという術語で名付けられたその現象は、その後は物理現象として実験室的に再現することを求めて、人間の主観を非科学的と排した実験研究がされたが、その研究はテレパシー発生の本質である切羽詰まった時の人間の念力といった精神の限界作用を無視したため全く成果を上げず、逆にテレパシーそのものを存在しないものとして否定した。しかしその事実があったことなのである。

3-5 念ずることの「気」の発生と伝播 テレパシー

現代科学で計測できず、心理学的客観的な実験で確認できないテレパシーはダークエネルギー波の伝播である可能性がある。ダークエネルギーは理論上波動であることはわかっているがその主体はわからず計測にかからないからだ。先に述べたように「気」はダークエネルギーの可能性があ

る。わからない同志をつなげるとテレパシーは「気」によって発動されて、その正体であるダークエネルギーの波動として伝播されて人間間の特別な意思伝達が可能なのだという仮説が成り立つ。

「気」を強力に発することのできる人は、特別の鍛錬を受けた人である。達人は「気」を発して人をなぎ倒すこともできる。普通の人にはできない。そうであれば、普通の人にはテレパシー発信などできそうにないが、ベルクソン時代の証言から見れば、普段そのような「気」の訓練を受けていない戦場での兵士も、死に臨み、愛する人に伝えたいと必死の思い（念力）を持ってしまった状況で、人に備わった「気」の発信が自然とできてしまったというふうを考えるほかない。

またその波動を受信した兵士の妻も「気」のことを知らぬ普通の人であるが、然し妻であったから発信者に特別に共感する気持ちをいだいた人であった。電波に取る受発信が成立するためには、電波の周波数を送受信で同調する必要がある。テレパシー通信にも人間はその波動に同調する能力が備わっているとしか考えられないのだ。

テレパシーの実験にはそのような特別な状況に人間を置き強い念力を起こさせ、一方で彼と特別な共感を持つ受信者がいなければ成立しないことになる。実験室的に人間の主観を抜きにした実験をしても成功しない筈である。

将来ダークエネルギーの解明が進み、今の電磁波と同じように自由に発受信できる時代が来れば、テレパシーも実験室でできるようになるであろう。その時人間と植物の対話も自由になる。

人間の精神の能力はこのようにまだまだ未開拓の世界があるのだ。ベルグソンは、人間はまだ進化の途上にあり、今は停滞しているがやがて次なる進化の段階に進むであろうと述べた。それは肉体的なものではありえず、精神の上で起きるしかなく、またその可能性は大きい。

その世界をイメージーションで展開してみると次のエピローグのようになる。それは空想の世界なのでお好きでない方は省略してください。

4、エピローグ

現在はダークマターについては、重力がありながら電気量を持たないということ、重力レンズ効果を使つての観測によって、宇宙における分布は銀河の分布に似ているということくらいしかわかっていない。またダークエネルギーは、宇宙空間に偏在していること、重力に対して斥力の作用があることくらいしかわかっていない。人間の科学は電気を梃子として発達したので、電気を持たないこれらの存在には当面歯が立たないのだ。

しかし今から数百年後の未来世紀になれば、人間は間違いなくダークマター、ダークエネルギーに関するまともな科学を得ることになるだろう。なぜならそれが目下人間科学の最大のフロンティアであり、そこに人間の叡知が集中するからだ。その科学は宇宙探査と宇宙研究によってのみ発展すると考えられるがこれから人類の宇宙探索能力は加速的に進むからだ。

その本質が解明されると、いま手にしている物質と同じように、それらの解析も進み、合成もできるようになっているだろう。そうなれば、今は全く分からない人間の精神の構造や、肉体との結合の仕組みもわかってくるに違いない。

そうなった時に、予測される人間に対する大きな変化の事態は、人間精神の生前離脱が可能になることだ。いまは、精神が肉体の束縛を解き放つて自由になるのは、肉体の死を迎える時だけだ。だからその先のことを今は誰も知らない。これまでは極めて限られた人間が臨死体験で、離脱経験を報告しているが、共同体験にはならないし、追試ができない。

だからそれがだれにでも可能になるということは、想像を絶する事態なのだが、あえてその先を想像してみよう。

生前離脱が可能になればどうなるのか。

それを考えるためにもう一度これまで述べた仮説に戻らなければならない。すなわち人間の精神はダークマターとダークエネルギーで出来ているという仮説だ。この精神を得た人間は、現実にはないことも想像する力を持つこととなった。イマジネーションだ。この想像力は時間、空間を自由

に飛び回る。それは当たり前のように思ってしまうが、実はそれは精神がダークマターとダークエネルギーで出来ているからなのだとすると怪訝な顔をされるだろう。しかしダークマターとダークエネルギーこそは5次元の運動領域を持っているからなのだと説明すれば、あるいはと納得いただけるのではないか。5次元とは我々が体験する3次元の世界に時間軸と重力軸を加えたものだ。そしてその時間軸と重力軸を自由に動けるということが、ダークマターとダークエネルギーからなる精神の特徴なのだ。

しかし肉体の制約に縛られている限り、自由な想像と言っても人間世界の範囲に限られてしまう。それ以上は人智が及ばないからだ。

それが生きている肉体から離脱できれば、足元から宇宙に接続している五次元の世界に飛び立つことになる。そして時間軸と重力軸を自由に動くならば、130億光年もある広大な宇宙を瞬時にくまなく体験できるのだ。

そこで見えてくる世界は、今我々が望遠鏡で覗く物質的宇宙だけではないだろう。なぜなら卒業した人間の精神群がそこに向かって旅立っているはずだからだ。過去からの、あらゆる精神群が満ち満ちて、今を生きている世界、言い換えれば、神の世界というほかない世界だ。

肉体という素晴らしい装置に寄生していた精神体は、その世界に適応するにはある変成養生あるいは訓練の時間が必要なのかもしれない。ゲーテのメタモルフォーゼ、ファウストの最終場面に書かれた姿がそれを予想しているのだ。その体験を経験した人間は間違いなく異質な成長を達成するだろう。

生前離脱が可能になった時代になれば、教育というのも一変する。人間は生まれてある教育期間を経て精神が成熟したら、一定時間、精神の生前離脱の修養が課せられるようになる。その準備と実施の期間、肉体は安全に見守られている。離脱精神の修養体験が終われば、再び肉体に戻るが、五次元の世界での経験は時間軸が自由になるので戻るまでの現実社会での時間はほんの瞬く間で終わる。再び健康な肉体とともに人生を過ごすことは、精神の成長にはかけがえのない重要性を持っているからだ。

人間の進化はそうように起きるのだ。

私の友人のご子息である小野雅裕さんは米国 NASA の JPL 研究所で宇宙探査に携わっておられ、余暇に「宇宙に命はあるか」という面白い本を書かれた。次のように語られている。銀河には数千億の惑星がある。生命を生みだせる条件のある惑星も限りなくあるわけだから、そこには地球より先進的な文明をもつ星が必ずある。彼らは地球から発せられた電波を受信し地球文明を発見し、それへのレスポンスを出してくれているかも知れない。しかし、それは何光年も遠いところにあることだから、地球人がそれを受信するには 1000 年 2000 年かかるとみてもおかしくない。問題は、その時地球文明が崩壊してしまっていないかだ、戦争や地球温暖化を起こした人類がそれを解決できなければ人類は消滅しているかもしれない。

彼は人類がもつイマジネーションの力で突き動かされる限り、きっと宇宙文明の仲間入りを成し遂げるだろうと述べている。

私も同意見だ。人間が今はダークと呼んでいるものが、明るい世界に持ち出されたとき、人間の進化は、精神の自由離脱能力を得る。そして必須の学習が五次元の宇宙世界を体験学習することになった時、あらゆるエゴからも解放され、やっと動物の世界から人間の純粹世界である高貴な愛の精神世界を得る。地球の崩壊の危険はその時解消する。

広い宇宙の生命進化の姿を想像すると、地球では宇宙から来たいのちの種が物質に宿り、その制約と闘いながら進化してきたのだが、それとは違うルートがあってもおかしくない。それはダークマター・ダークエネルギーが、物質の介在を経ずして「いのち」を生みだすケースだ。つまり人間が 100 万年かかって成し遂げた進化、すなわち精神の世界を、初めから純粹な形で実現している世界がこの広い宇宙にあるかもしれない。彼らは五次元の存在だから時間空間を自由に移動する。物質的エネルギーの補給は必要としないから、資源の獲得欲求はない、侵略など無縁だ。時に地球をも、楽しみで見学に来ることもある。それが UFO なのかもしれぬ。

地球人の進化はまどろっこいし、次の進化までには、まだ数百年かかるかもしれないが、やがて小野さんの言う「ホモ・アストロルム」への仲間入りができるという夢がある。

それが実現することを願ってやまない。

<参考にした本>

- 1) 宇宙のダークエネルギー 「未知なる力」の謎を解く 土居守 松原隆彦
光文社新書 2011-9-30
- 2) 気とは何か 人体が発するエネルギー 湯浅泰雄 NHK ブックス 1991-
1-20
- 3) 気 修行 身体 湯浅泰雄 平河出版社 1986-11-25
- 4) 気の世界 東大公開講座 東大出版会 1990-2-28
- 5) 気で観る人体 経絡とツボのネットワーク 池上正治 講談社現代文庫
1992-12-20
- 6) 病を治す哲学 伝説的医書「黄帝内経」の驚異 青島大明 講談社新書
2009-5-20
- 7) 意識 情報 エネルギー 医学—スピリチュアル健康学への道 奥健夫
エンタプライズ出版部 2007/3/24
- 8) 祈り 越前喜六編著 教友社 2014-12-3
- 9) 随想集「人生の秋に」 ヘルマン・ホイヴェルス著 春秋社 1969-11-25
- 10) ゲーテ「ファウスト」第五幕 深山の峡谷 柴田翔訳 1999/9/27
- 11) 彗星パンスペルミア 生命の源を宇宙に探す チャンドラ・ウィックマ
シング著 松井孝典監修 所源亮訳 恒星社厚生閣 2017/5/1
- 12) 生命・DNA は宇宙からやってきた フレッド・ホイル、チャンドラ・ウイ
ックマシング著 茂木健一郎監訳 徳間書店 2010-8-31
- 13) 宇宙に命はあるか 人類が旅した一千億分の八 小野雅裕 S B クリエ
イティブ社 2018-2-15